# 印度の古話

幸田露伴

青空文庫

いづれの邦にも古話といふものありて、なかなかに近き頃の小説家などの作り設くとも及びがたきおもしろみあるものなり。されど小国民を読むほどの少年諸子には、桃太郎猿蟹合戦の類も珍らしからざるべく、また『韓非子』『荘子』などに出でたるも珍らしからざるべければ、日本支那のは姑く措きて印度の古話を蒐め綴り、前に宝の蔵と名づけて学齢館の需めに応じ出版せしめしに、おもひのほかに面白しとて少年諸子の、なほその他にも話ありや、あらば聞かせよといひ越し玉ふもあるまま、今また一条の物語りをここに載すべし。印度は諸子が父上母上の頃には天竺と呼びたる最早くより開け進みし国にて、今日よりして評するも世界の文明の母ともいふべきところなれば、従つて趣味ある古話にも富みたり、御望みならむには随分諸子のために珍奇なる話を取り出して一年や二年の間はこの紙上に掲げん。さてこの号には、利※、阿利※兄弟の譚を載すべし。

むかしむかし、一人の長者ありて二人の子を有てり。兄を利といひ弟を阿利といひしが、長老は常々二人に対ひて、高きものは堕ち、常なきものは尽き、生あれば死あり、会へるものは離るることあらむと諭しける。されど一家は常に富み栄えて別に忌はしきことにも遇はず、世を楽しく過ごし行きけるに、長老が諭しのあたるべき時は来りて、老の身に病を得しより長者は枕つひにあがらず、いよいよ生命終るべく定まりたり。時に長者は二人の子を枕辺に招きて、死するも生くるも天命なれば汝等みだりに歎くべからず、ただ我終焉に臨みて汝等に言ひ置くことあれば能く心に留めて忘るるなかれ、我が亡き後は汝等二人決して分れをることをすべからず、譬へば一条の糸にては象を係ぐこと難けれど多くの糸を集めて縄となさば大象をも係ぐを得べきがごとく、兄弟力を併せて家を保たんには家も無事長久なるべけれど汝等互ひに私慾を図りて分れ分れとなりなば、一条の糸の弱きがごとくなりて家も衰へ亡ぶべし、この我が訓を能く記えて決して背くことなかれと苦ごろに誡め諭して現世を逝りければ、兄弟共に父の遺訓に随ひて互ひに助けあひつつ安楽に日を消しけり。

さるほどに弟も生長して年頃となりしかば、縁ありしを幸として兄はそのため婦を迎へ遣りしに、この婦心狭くして良からぬものなりしゆゑ夫に対ひて、汝はあたかも奴隷のやうなり、金銀用度も皆兄まかせにて我が所有といふものもなく、唯衣ることと食ふことに不足なさざるばかりなれば奴隷といふても宜かるべし、汝如何ほど働きたりとて唯この家を富ますのみにて汝の所有の殖ゆるにもあらねば、まことに以て楽み薄し、と賢顔に説きければ、弟はこれより分居の心を生じて、兄に財産を分ちくれむことを求めける。兄は、亡き父上の御遺言をも忘れて汝は分居せむとや、さても分別違ひのことを能くも汝はいひ得るよ、と度々弟を誡め諭して敢て弟のいふところを許さざりしが、弟の堅く分居せんといひ張りて已まぬに打負けて、遂に一切の財産を正半分にし、その一方を弟に与へぬ。

弟夫婦は年少きまま無益の奢侈に財を費し、幾時も経ざるに貧しくなりて、兄の許に合力を乞ひに来ければ、兄は是非なく銭十万を与へけるに、それをも少時に用ひ尽してまた合力を乞ひに来りぬ。一人の弟のことなればと、苦き顔もせで兄はいふままた十万を与へしに、またそれをさへ遣ひ果して、例の通りに無心に来ること前

の如し。前後合せてかくの如きこと六反に及びけれど、その度ごとに十万づつ与へて兄は惜ともおもはざりしが、七反目にいたりてさすがに堪へきれずなり、父上の遺訓にも背きしのみか数次来りて財を乞ふ段、弟とはいへ奇怪なり、貧しくなりて苦むも皆自らの心がらぞ、この度だけは十万銭を例のごとくに与ふべけれど以後は来るとも与ふまじきぞ、能く心して生活の道を治めよ、と苦ろに説き示しければ、弟はこれを口惜く思ひてその後生活の道に心を用ひ、漸く富を致しけるが、それに引替へ兄はまた数次弟に財を与へしより貧しくなりて自ら支へがたきに及び、かつて与へしこともあれば今は弟に少時のところを助けてもらはむと、弟のところに到りて、我この頃は大きに財に乏しきゆゑ何卒合力してくれよといひけるに、弟は答へて、先に我が窮困して汝が許にいたり僅の合力を乞ひしとき汝は何といひ玉ひし、貧しくなりて苦むも皆みづからの心がらぞと情なく我を責め玉ひしにはあらずや、我今汝にその語を返さん、貧しくなりて苦むも皆みづからの心がらぞ、我は汝を助けがたし、と恩を忘れて謝絶りける。

　兄は弟のあさましき言葉に深き愁を起し、血統の兄弟にてすらもかくまでに酷く情なければまして縁なき世の人をや、ああ厭はしき世の中なりと、狭き心に思ひ定めて商買を廃め、僧と身をなして、ひたすらに悪き世を善に導かんと修行に心を委ね、ある山深きところに到りて精勤苦行しゐたりけるが、年月経て一旦富みし弟の阿利※は、兄に対して薄情なりし報いのためにや損毛のみ打つづきてまた貧者となり、薪を売りて辛くも活くる身となりけり。時に兄の利※は托鉢なして食を得んと城中に入りしが、生憎布施するものもなかりければ空鉢をもて還らんとしけるが、途にて弟に行遇ひたり。弟は兄を剃髪染衣の身ならむとは思ひもかけず、兄は弟を薪売り人になりをらむとは思ひもかけず、かつ諸共に宴れ齢老いたればそれとも心づかざれど、弟の阿利　は尊げなる僧の饑ゑたる面色して空鉢を捧げ還る風情を見るより、図らず惻隠の善心を起し、往時兄をば情なくせしことをも思ひ浮めて悔いつつ、薪に代へて僅に得し稗の※あるを与へんと僧を呼び留め、尊者よ、道のためにせらるる尊き人よ、幸ひに我が奉つる麁食を納め玉はむや、と問へば僧はふりかへりて、薪を売る人よ、世の慾を捨てし我らなればその芳志を受るのみ、美味と麁食とを撰ばず、纔に身をば支ふれば足れりといふにぞ、便ち稗の麨を布施しけるに、僧は稗の麨を食し訖りて去たりける。

　その後阿利　は薪を取らんと山に行きしが、道にて一匹の兎を見ければ杖ふり上げて丁と撩ちしに、忽ち兎は死人と変じて阿利　の項に搦み着きたり。これはと大きに驚き呆れて、推し剥がさんと力を出せど少しも離るることなければ、人を頼みて挽却らしめしも一向さらにその甲斐なし。是非なく夜に紛れて我家に帰れば、こはまた不思議や、死人の両手は自然に解けて体は地に堕ち、見る見る灼々たる光輝を発して無垢の黄金像となりけり。阿利　は大きに驚きながらその像の頭を截り取りしに、頭はまた新に自然と生じ、また截り取ればまた生じぬ。手を截り去れば手また生じ、脚を截り去れば脚また生じ、金の頭金の手金の脚家充満となりて、爛々燦々と輝きわたりければ、この事王の耳に入りしが、仔細を問ひ玉ふに及びて、これ善行の報なりと知れ、福人なりとて売薪者を急に一聚落の長に封ぜられしとぞ。眼前には利ありとも不善によりて保ちたる利は終に保ちがたく、眼前には福を獲ずとも善心によりて生

ずる福は終に大きなるものなり。

　むかしむかし棄老国と号ばれたる国ありて、其国に住めるものは、自己が父母の老い衰へて物の役にも立たずなれば、老人は国の費えなりとて遠き山の奥野の末なんどに駆り棄つるを恒例とし、また一国の常法となしゐけるが、ここに一人の孝心深き大臣ありけり。日頃やさしく父に事へて孝養怠りなかりしが、月日の経つは是非なきことにてその父やうやく老いにければ、国法に順はむには山にもせよ野にせよ里距れたる地へ棄つべくなりぬ。されども元来孝心深き大臣の、如何で然る酷きことをなし得べき。事露はれて国法に背きたる罪を問はれなばそれまでなりと、深く地を掘りて密室をその中に造り設け、表面は那処へか棄てたるやうにもてなして父をば其室に忍ばせ置き、なほ孝養を尽しける。

　時にたまたま天の神ありて突然に棄老の王宮に降り、国王ならびに諸臣に対ひて、手に持てる二の蛇を殿上に置き、見よ見よ汝ら、汝らこの蛇のいづれか雄にしていづれか雌なるを別ち得るや、別ち得ばよし、別ち得ずんば国王よく聞け、汝を亡ぼし、汝の国をも我が神力もて滅すべし、七日の間にこの棄老をば殄ぼすべきぞ、と厳然として詰げければ、王は大きに驚き畏れ、群臣と共に頭をあつめて答弁をなさんと議れども、誰とて蛇の雌雄をば見定むべくもあらぬままただ当惑するばかりなり。国の大事ぞ、等閑になせそ、もし何者にもあれ天神の難問を能く解き開き得ば厚く賞与をすべきなりと、一国内に洽く知らしめて答弁を募るに応ずるものも更になし。彼の大臣は家に帰りて、もし我が父の知ることもやと例の密室に至りてこの由を述べけるに、そは難渋きことにあらず、軟※にして細きものを蛇に近づけてその躁ぐを雄と知り、静かなるを雌と知るべしと教へければ、大臣は急に王宮に行きてこの旨をいひ出で、試しみるに果してその言の如く、雄雌紛るるかたもあらず。王は悦びて天神に対ひ、これは雌にしてこれは雄なりと答ふるにその答誤りなければ、天神はまた一大白象を現して、この象の重さ幾斤両ぞ、答へ得ずんば国を覆さん、と難題を出しぬ。

　王も諸臣も、如何にして秤皿にも載せがたきこの大象の重さを知り得んと答へ迷ひけるが、彼大臣はまた父に問ひ尋ぬるに、そは易きことなり、象をば船に打乗せて水の船を没すところに印をつけ置き、さて象の代りに石を積みて先の印のところまで船の水に没るるを見計らひ、一々石の量目を量り集めなば即ち象の斤両を得べしと教へられ、道理なりと合点してこの智をもて天神に答へける。よしよし、さらばまた問はむ、一掬の水の大海より多きことあり、この理を知るや、と天神の例の如くに難問を下すに、例のごとく王らはまた答へを為し得で困りけれど、彼大臣は例のごとく老父の教を得て、その語は極めて解きやすし、もし人ありて慈悲心をもて父母乃至世の病人なんどに水を施さば、仮令その量少くして僅に掌に掬びたるほどなりとも、その功徳広大無辺にして大海といへども比ぶるに足らじといひければ、この度は天神忽ち身を変じて、眉うつくしく色あざやかに、玉とも花ともいふべきまで※麗き女と化けながら、世間に我ほど端厳きものあるべきやと尋ねたり。

　王らは例の如く答なかりしが大臣はまた父にききて、世間にはなほ端厳く妙なるもののなきにあらず、道を守りて心を正し、父母に事へては孝に君に事へては忠に、他に対しては温和にして、心に大なる慈悲を懐くものあらばその端厳さ千万倍なり、今の汝をそれに

比べば※猴の如くに劣りなんと答ふるに、天神はまた栴檀の木の頭尾知れざるものを出して、いづれの方が樹の根のかたにていづれの方が樹梢の方ぞ、疾く答へよ、と問ひ詰りぬ。王らはまた答へ得ざりしが彼大臣はまた父に教へられて、木を水中に投げ入れつ、浮きたる方こそ樹末なれ、根の方は木理つみて自然と重ければ下に沈むなりと答へけるに、天神はまた同じやうなる牝馬二匹を指して、那箇が母か那箇が子か、と詰り問ひぬ。君臣共に例の通り答へ得ざれば、彼大臣はまたもや父より教へられて、草を一時に食はせんに母の馬はかならず先に子に食はせ、子の駒は母より後に食ふことなからむ、と道理を詰めて答へけるを、天神大きに賞讃なし、幾番の我が難問を一々申し開き得たれば、国王ならびに群臣とも心易かれ、今より後は我この国を護りやりて外敵侵害し能はざらしめん、といひ置きて天に上りける。

　国王大きに悦びて、これも皆彼者の智慧ありし故なればと、彼大臣を呼び出して恩賞の沙汰ありけるに、この御恩賞としては願はくは臣が罪を免したまへ、実は臣国法を破りて老いたる父を棄てざりしが、その父に尋ね問ひて一々答を得しなり、といひければ王は大きに感歎なし、その老父を召出して師となし、大臣を厚く賞し、なほ国中に令を下して老いたるものを棄つるをば厳しく禁じ、四民に孝行を篤く勧められけるとぞ。老いたるものとて侮るべからず、無用に似たる人をも物をも浪に棄てずば、また益をなすことあるべし。

# 青空文庫情報

底本：「日本児童文学名作集（上）」岩波文庫、岩波書店
　　1994（平成6）年2月16日第1刷
底本の親本：「露伴全集10」岩波書店
　　1953（昭和28）年7月
初出：「小国民」学齢館
　　1893（明治26）年6月下旬、7月上旬
※「ルビは現代仮名遣い」とする底本の編集方針にそい、ルビの拗音、促音は小書きしました。
入力：広橋はやみ
校正：門田裕志
2005年1月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 印度の古話

幸田露伴

2026年10月1日　第二版

## 奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/